

障害児支援作業部会（第1回）で出された委員のご意見等

1 部会での議論の視点に関すること

- 現状を踏まえ、中長期的な視点で見たときに、今後何が必要かを議論していくことになる。
- 様々な課題があるが、アーチルを要として、仙台市の障害児者福祉をどのように高めていくかが大事な視点ではないか。
- 地域の意識を底上げしていくような考え方、システム、視点についても、作業部会の中で提案できるといい。
- 現状を知ることからしか、具体的な対策は出てこないのではないか。

2 重症心身障害児、医ケア児に関する現状認識・課題等について

- 重症心身障害のあるお子さんと医療的ケアを必要とするお子さんは、住んでいる地域とのつながりが薄い。挨拶もあまりできておらず、ちょっとしたことを頼む人も身近にいないことがある。長時間をかけて、車で移動して施設を利用される方がいるが、身近な地域の中でサービスを利用できれば、地域とのつながりをつくることに繋がるのではないか。

3 切れ目のない支援・連携に関する現状認識・課題等について

- 教育現場の先生方は、家庭の支援が重要だと十分に認識しているが、現在は家庭を支援するシステムが十分ではない。そこで、様々な団体や組織の役割分担が重要になるため、スムーズに連携が取れるようになっていけるといい。
- 環境整備や個別支援の必要性は誰もがわかっていること。それぞれが置かれている立場をどのように共有していくかが次のステップではないか。
- コーディネート機能は、ライフステージ毎の機関の詳細を理解してこそ機能する。
- 児童発達支援事業は、保護者の方にとって、困り事や不安が顕在化して様々な支援を必要とする大事な時期に行われるので、事業の最新の現状を正しくお知らせし課題を共有して頂けるよう、纏める等の工夫が必要。
- 同じ地域で取り組んでいる事業所同士で学びを深め、お互いの得意分野を生かしながら、地域に住んでいる子どもたちを見守り、育てていくためのシステムをぜひ行政レベルでつくっていただきたい。
- 子育て支援の現場にいる担い手に対する、研修や講習を通じた専門的な知見の共有は人材育成という意味で重要。子育て分野と障害部門との連携や、アーチルとの関わりがより一層求められている。

- 診断名が付いている子どもだけでなく、配慮が必要な子どもに対する支援が求められており、幼稚園や保育所との連携の強化や、切れ目のない縦のつながりがクローズアップされている。子ども未来局と健康福祉局の連携、そして教育における家族支援の在り方が課題。

4 その他の現状認識・課題等について

- 総じてアーチルへの相談件数は少しずつ増え、児童を支援する施設も少しずつ増えてきてはいる。しかし本当に心配なのは、相談に来ておらず、アーチルにつながっていない人たちではないか。
- アーチルの相談支援や地域の相談支援が充実してくれば、だんだんそれらに丸投げしてしまうようになり、容量が一杯になってしまうジレンマがある。
- 親御さんへのアプローチにおいて、心配事が出てきてからつながるのは難しい。厚生労働省でも、フィンランドで行われている、妊娠期からつながり続ける「ネウボラ」というシステムを参考に、地域でネウボラを推奨しようという動きがある。そこに取り組む必要があるのではないか。
- 障害の有無だけではなく、親の経済的な状況や虐待など、現在の子どもは複合的な課題に直面している。この養育環境における課題は、小学校・中学校・高等学校のすべてにおいて考えるべき視点となっている。
- 幼児保育の現場において、グレーゾーンの子どものも含めて、特別な支援を必要とする子どもが増えている。しかし、発達上の課題を抱えている子どもが増えていることに、現場は対応し切れていない。
- 本当にサービスを必要としている子どもに、サービスが届かないことが課題。親御さんに対するアプローチをどうすべきかが難しく、つながりが少ない親御さんに対して、どのようにサービスを受けていただくか、然るべき機関につないでいくかが困難。
- 地域には人が資源としてたくさん隠れているので、そのような方々を利活用することも必要。